



法学講義十年

東壽太郎

一般教育の法学の講義をはじめ十年になる。前の大学では、法学部なのでベテランの法学者が多く、担当する必要がなかった。ここでは、リベラル・アーツの法学部の大学で、他に担当する人もなく、当然のことのように引き受けるはめとなった。法学部出身とはいいながら、政治コースを卒業し、現在国際法を専攻するものとしては、軽い役割とはいえない。公法関係はともかくとして、民商刑諸法、訴訟法には弱いので、多方面にわたる再勉強をしなければならぬ。講義の準備には苦勞した。ところが、さいきんでは、講義も準備も一つの楽しみになってきたような気がしてきた。

将来、かならずしも法律関係の学問や仕事をしない学生に対していわゆるリーガル・マインドを持たせるほどの講義ができる自信は

まるでない。それだけに、法学的雑談に墮さない程度に、自分なりの法律観を話すことができればよろうと聞き直っている。そうすると、法現象には興味あることが多く、体系的には理解していないかもしれないが、専門外の法律の書物を読む楽しみを得た。自分にとって面白い事例は、学生にも興味もてるであろうと思つて話すことは楽しみの一面もある。無責任かもしれないが、ディレッタントイズムの強さであろう。また、このようなことを考えるのは、法学の実践を通じて、法学を担当する馬鹿だけは重ねたことになるのであろうか。

とはいふものの、専門外の分野の話はむづかしい。先日、妻の相続分の見なおしをしようという相続法改正案の新聞記事を材料として話しているうちに、非嫡出子の相続分が嫡出子の二分の一になつているという話に及んだ。このような差別を設けることは、人の平等の原則に反するか、適法な婚姻を尊重するといふ建前から、子に罪はないがこの差別はかならずしも平等に反しないか、差別しないで平等な相続を認めることは、

妻を事実上公認することになるから差別が必要か、とか諸説は披露した。しかし、家族法について確たる解釈原則を持たぬ身で、学生に持論を結論として述べるわけにはいかない。よく考えてみて下さい。いくらいのところまで終つてしまつた。

財産法上の問題は、取引の安全とか、経済合理主義とか、専攻分野でも用いられるような原理を通じて、ある程度の一貫した理解ができるような気がする。家族法についても、諸先輩の著述を読みながら、自分なりの考え方を持とうとしている。しかし、人間の自由と平等という基本原理が、社会的伝統とか国民感情とかによる配慮によつて、原理そのままに法制化されていない場合には、専門的訓練を受けた経験がないと、どのように説明するかに困つてしまうのである。法律学全般に通暁することとは至難の業で、このようなことは法学を講義する者にとってあたりまえのことであろう。私にとつて、十年の経験の救いは、多くの知らないことを知る楽しみを得たことであつた。つぎの十年は、ディレッタントの域をどのようにし

て超えるかということである。
(ひがし・じゅんたろう・津田塾大学教授)

ドイツの原発問題

保木本一郎

「サイレンが一斉に鳴ったら、窓をしっかりと閉めて戸外に出ないでラジオのスイッチを入れなさい(マインツ内務省公報)。」「原発周辺住民には緊急避難訓練が必要(ハイデルベルグ大学アルトナー教授、連邦議会で証言)」

アメリカのスリーマイル事件は、ここドイツでも予想以上の大きな影を落しているようである。私がドイツに来てから一ヵ月半になるが、ゲーテ・インスティテュートのあるポツバルトの下宿のおばさんが毎日部屋においてくれる新聞(Klein-Zeitung)には、連日のようにどこかに原発の記事が見られる。

私の最初の驚きは、ライン河に面したコブレンツのすぐ北にあるミュールハイム原発は、TEEの



ひんばんに走る線路や国道九号線から、ものの百米も離れていないことだ。「住民はそれだけ原発の安全性を信頼しているのか」と、いろいろ聞いてみたが、「決してそうではないのだが……」と両手をひろげて肩をすくめる人が多い。

ドイツ中の目と耳がテレビ中継に釘付けになったのは、五月一六日のハノーヴァーのニーダーザクセン議会での討論であった。ゴアレーベン(Gorleben)にある岩塩層を深く掘り下げて死の灰の貯蔵所と核燃料の再処理工場を作り、これによって原発の発電量を現在の総発電量に占める一二%の割合から一九八五年には二五%に高めようというナショナルプロジェクトをめぐる、連日のように熱い賛否両論がテレビ・新聞を賑わしていたようである。

ニーダーザクセン議会・政府の決定前日には、激しいデモがあり、農民と市民がゴアレーベンの予定地に至るすべての道路を車で閉鎖してしまつた。

州議会では、シュミットの意をうけたSPDは賛成、CDU・CSU、FDPは反対、激しい議論が長々と続いた(ゲーテの授業で

はこのテレビ中継が教材となつた)。CDUのアルブレヒト州首相は、「技術的には再処理工場には問題はないと思うが、これだけ反対があるのだから、さしあたって政治的には実施不可能である(politisch derzeit nicht durchsetzbar)」と述べ、試験的ボーリングのみ許し、工場建設は不許可処分にした。

ポッパルトに居てドイツ原子力法をよく調べる機会が未だないのだが、同法によると、日本と異なり、再処理工場等を新設できないと、これ以上の原発は建設できないらしい。

ボン政府はこの決定に深い憂慮と危惧を示し、時あたかもヨーロッパではガソリンの値上りがひどい(新聞によると、アメリカは原油備蓄政策の下に輸入原油に一ペルあたり五ドルの補助金を出しているため、これが世界的な原油の買いあさりを招来し品不足になつているという)ので、シュミットは、連日のように原発の必要性を説いている。

しかし、多くの論説は、「エネルギーには必要だが、市民の生命と健康は経済に優先する。」「原発に

は技術的に未だ十分解明されていない点が多い。」「もっと節約を」「日曜祭日には車をすてよう。」「建物を断熱構造に」と様々である。

次の週、ライン河を舟で廻り、ローレライを経て、ラインランドプファルツの州都マインツに行つた。町のいたるところに「CDUアルブレヒト来る」という写真入りのポスターがはつてある。さては、彼は保守党員ながら、ゴアレーベンの政治的判断で一種の英雄になつたのかなと思つた。ところがである。二、三日するとラジオや新聞が、アルブレヒトはかなり前からゴアレーベンや原発問題を政治的に利用して、宰相候補者(Kanzlerkandidat)への強力な指名獲得キャンペーンを行っている事を報じ、ついにCDUは彼を指名し、他方CSUは本命シュトラウスを指名したため、保守本命をめぐって両者はげしく争い、調整できないまま、今、CDU・CSUは一種の分裂状態にある。

私は一カ月前、ハンブルグ大学のティーム教授と話した時、彼が、「アルブレヒトはきわめて政治的だ」と言った言葉の意味

を、やっと今悟つた。

ライン河畔を独り歩きながら、私はこう思つたりするのだ。「政治とはそのようなものなのか」「でも、それはそれでいいのではないのだろうか」

夕さればラインの河面に霧みちて

むせぶ霧笛に春の淡月あつぎ

(一九七九・六・六)

(ほきもと・いちろう 国学院大学教授)

「大いなる田舎」の一考察

おがわ・としお

名古屋はいまも「大いなる田舎」だといわれている。道路だけは広くよく整備されているが、文化の程度は旧態依然たるものがあるといのであろう。「いまさら、なぜ文化はつるところへ行くのか」といわれながら、東京を離れ名古屋に移り住んで、もう五年余になる。そこで少しは土地の様子